

熊本県益城町訪問 報告 (2017.3.17~3.19)

日 時：平成29年3月18日(土)、19日(日)

場 所：益城町総合体育館，益城町安永地区，熊本学園大学ボランティアセンター

出張者：人文社会科学部 教授 李 永俊（ボランティアセンター副センター長）

医学部保健学科 2年 菊地 洋絵

人文社会科学部 2年 田口 唯

3月17日から3日間、教員学生計3人で熊本県益城町を訪問しました。主な活動としては被災地や仮設住宅の訪問、熊本学園大学ボランティアセンターが運営している活動に参加しました。

3月17日(金)：1日目

1日目は熊本での活動はなく、移動がメインの一日でした。正午に青森空港を出発し、羽田空港を経由して17時頃に熊本空港に到着しました。その後ホテルに向かいました。

3月18日(土)：2日目

2日目は熊本YMCAへ熊本地震支援金を贈呈し、その後益城町を訪問しました。

熊本地震支援金の贈呈は益城町総合体育館で行いました。



(贈呈式にて、李教授から寄附金の贈呈)



(贈呈式記念撮影の様子)

贈呈の際、熊本YMCAの大久保さんと丸目さんなどに熊本地震の状況を伺いました。熊本地震直後、益城町総合体育館に避難してきた人たちは段ボールベッドを使用していたようです。段ボールベッドは体育館の1階で500床、2階で100床の計600床あったようです。このような段ボールベッドはプライバシーが確保されないこともあり、起きている人は眠っている人を気遣って体育館の外へ行き、お茶をしたりお話しをしたりしていたようで

す。また段ボールベッドはもともと段ボールベッド分のスペースしか用意していなかったようです。しかし町長の意見により、段ボールベッド分のスペースに加えて畳一枚分のスペースが用意されました。実際に段ボールベッドに寝転んだり座ったりしてみましたが、頑丈で 120 kg まで対応しているようです。益城町総合体育館は現在使用することができず、閉鎖状態です。現在は設計の最中によるので、次に体育館を使えるようになるのは 3 年ほどかかると聞きました。



(益城町総合体育館 外観)



(益城町総合体育館視察の様子)



(益城町総合体育館のアスファルトの様子)

募金贈呈のあと、益城町を車で一周しました。熊本地震からもうすぐ 1 年が経とうとしていますが、多くの場所が更地になっており、建物の再建築がスタートしていました。しかしまだ熊本地震の直後の状態の家屋も少なからずありました。また訪問途中、益城町の住民にお会いし、現在の益城町や住民たちの様子を伺うことができました。益城町の住民の方々は思っていた以上に明るく元気でした。また青森県から熊本に来たと話をすると、「熊本地震よりも東日本大震災の方が津波の被害もあったから大変だったでしょう。」と東日本大震災のことも話題にあがりました。住民の方々と少しの時間ではありますが、交流を通して復興に向けて一歩ずつ歩き出しているように感じました。



(益城町の様子)



(更地になっている場所)



(更地になっていない場所)



(住民の方にケア帽子を手渡す様子)



(益城町にあった復興と書かれてあったバス)

3月19日（日）：3日目

3日目は8時45分に車にりんごや仮設住宅にいる子供たちに配る予定の文房具や帽子を積んだ後ホテルを出発し、9時30分ごろ熊本学園大学の照谷明日香先生と待ち合わせをしていた益城町公民館に着き、そこから初めに木山仮設住宅に向かいました。

木山仮設に10時ごろ到着し、熊本学園大学の先生方と挨拶をさせていただいた後、熊本学園大学の1年生で同じくボランティアに来ていた学生と仮設集会所にいる子供たちと思いきり遊びました。一番小さい子で熊本の震災が起きてからすぐに生まれたというまだ一歳にならない赤ちゃんから中学生まで幅の広い年齢の子供たちがたくさんいました。



(益城町木山仮設視察)

(青森りんごと子ども達 (木山仮設))

午前中は子供たちと外でおいかけっこをして遊んだり、仮設集会所の中で積み木を使って遊びました。積み木はすべて手作りだそうで木を切ってからそれぞれに鑿をかけて作られたそうです。木のいい匂いがしてとてもぬくもりを感じました。遊んでいる時、終始子供たちは笑顔と元気いっぱい、天気が良かったこともあったため3月なのに半袖の子どもも何人かいました。途中弘前から持ってきたりんごを切ってみんなで食べました。おいしいと言って食べてくれている様子が見られて良かったです。

みんなでお昼ご飯を頂いた後午後は、増やし鬼をしたりトランプをしたりしました。何度もバリアゾーンというものが発生し、捕まえることに苦労しましたが、本当に子供たちは疲れ知らずで、休憩をはさみながらもずっと走り回っていました。こっちが体力の限界を感じそうでした。

2時になってから文房具等を渡し、木山仮設住宅の人々とお別れをしました。ある子に「まだ遊びたい。もう帰っちゃうの?」「今度はいつ来るの?」と聞かれ上手く答えることができず、お別れが辛かったです。

木山仮設住宅を出た後、今度はテクノ仮設住宅に向かいました。2時15分に到着し、まずテクノ仮設住宅の規模の大きさに驚きました。そしてそこではテクノ仮設集会所の熊本

学園大学のボランティアセンターに所属する学生が運営するカフェ「おひさまカフェ」で木工づくりのお手伝いを短い時間でしたがさせてもらいました。



子供たちは小さな木の板に石などを使って魚や動物などの形を作り、さらにペンで絵を描き、色を付けてバッジを作っていました。私も一緒にやらせてもらったのですが、案外難しく未知の生物が出来上がってしまいました。しかし、子供たちは柔軟な発想を駆使しそれぞれ真剣な表情で素敵な作品を作り上げていました。印象的だったのは、自分の両親にプレゼントするために一生懸命工

夫しながら作っている子がいて、感謝の気持ちや誰かのためにとする気持ちの大切さを実感させられました。

また福岡県の大学や中央大学などからボランティアにきている大学生もいて少しの時間でしたが交流もでき、他大学の活動を知ることもできたため良かったです。

15時15分に活動を終了し、テクノ仮設住宅の人々や熊本学園大学の方々とお別れをし、空港に向かい熊本現地調査を無事終えました。

今回の熊本現地調査で、地震が起きた時の様子や起きた後の対応、避難所の様子など実際に現地の人々からお話を聞き、当時の様子を思い浮かべると辛いこともあるだろうに「これからも頑張らなきゃ!」と笑顔で話している姿に逆に元気をもらいました。また、青森県から来たと言っただけで「遠いところからわざわざありがとう」と言ってくれて自分たちの方が大変なことが多いと思うのに私たちに優しい言葉をかけてくれて本当に胸がいっぱいになりました。仮設住宅では年齢が上の子が下の子をよく面倒を見ていて子どもたちは全員仲が良く、とても楽しく活動ができました。

もしまた災害が起きたらどの様に行動するべきか、そのためには何をしたらよいのかなど今回の経験で色々考えさせられました。

今回お世話になった益城町の皆さま、熊本YMCAの職員の皆さま、熊本学園大学の照谷明日香先生と学生さん達、李先生、そして熊本現地調査に行く機会を作っていただいたことに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

菊地 洋絵

熊本での3日間のボランティア活動を通して自分で現地に出向き、自分の目で現状を確かめたり現地の人のお話を聞いたりすることでニュースや新聞などのメディアからではわからないことに気づくことができることを感じました。熊本に行く前までは、現地の人たちは

熊本地震からまだ 1 年経過していないので気持ちも沈んでいると勝手ながら思っていました。しかし現地の人と交流をしたり、益城町を訪問し、自分の目で益城町の現状を見たりして日々復興に向けて着実に進んでいることを感じることができました。特に 3 日目に訪問した木山仮設住宅の方々と話す機会が多く、多くの人が明るく元気で、希望を持っているように思えました。また東日本大震災のことも話題にあがり、熊本の人たちは津波の被害がない分、自分たちは恵まれていると話していました。このとき私は自分たちが辛い思いをしているにも関わらず、他の場所の災害の方が大変だと現地の人たちが話していた言葉から、現地の人たちが互いに励まし合いながら今まで復興に向けて希望を持った結果言葉にできるものだと思います。

今回私たちが行ったボランティア活動が現地の人たちにどのように思われているかわかりませんが、間接的に熊本地震について話を聞くよりも直接現地に出向くことでしか得ることができない物事を多く得ることができました。特に現地に行き、嬉しさや喜び、辛さなどさまざまな感情を抱くことが多く、ボランティア活動を通して現地にいかないと気づきがたい部分に気づくことができました。今後はこの 3 日間のことを弘前大学ボランティアセンターで共有し、私たちなりに熊本の現状や魅力など青森県にも伝えようと思います。また機会があるのであれば、熊本学園大学ボランティアセンターのみなさんと何らかの形で交流を図ることができたらと感じました。今回のボランティア活動で出会い、お世話になった皆様方、ありがとうございました。

田口 唯